

日本語版 Dickman Impulsivity Inventory の作成

小橋 真理子*¹・井田 政 則*²

Making the Japanese Version of the Dickman Impulsivity Inventory : A Study on the Reliability and Validity

KOBASHI Mariko and IDA Masanori

Abstract

Dickman (1990) proposed that there were two types of impulsivity, the Functional impulsivity (FI) and the Dysfunctional impulsivity (DI). He made the measure for the FI and the DI, and named it the Dickman Impulsivity Inventory (DII). In our previous study, we tried to make the Japanese version of the DII, but the result of its reliability and validity showed that factor structure was slightly low. Therefore this study aimed at the making the Japanese Version of the DII, and was investigated the reliability and validity. 546 participants (male: 205, female: 341) took part in this research. By exploratory factor analysis, we found two factors: FI (8 items), DI (8 items). By confirmatory factor analysis, the goodness-of-fit supported this model (RMSEA=.076, 90% CI=.068-.083; GFI=.902; AGFI=.871). We obtained high coefficient by the test-retest reliability. In order to check construct validity, we examined relationship between these two factors and other personality measurements related to impulsiveness. We confirmed the construct validity. These results showed that the Japanese Version of the DII was good model and can be used as a measure for the FI and DI in Japan.

[Keywords] impulsivity, DII, dysfunctional impulsivity, functional impulsivity

問 題

人は、衝動性という言葉を知るとどのようなイメージを持つだろうか。よく考えもせずに思いついたらすぐに行動に移してしまう、自分を自制することができない、じっと集中していることができないなど、ネガティブなイメージを抱いているのではないだろうか。衝動性は突発的な行動を引き起こすことから、さまざまな社会的あるいは臨床的問題行動につながる (e.g., Chambers & Potenza, 2003 ; de Wit, 2009 ; Jonah, 1997 ; Hoyle, Fejfar, & Miller, 2000)。心理学的には、衝動性は“自分や他人に良くない結果を招く可能性を考慮せずに内的あるいは外的な刺激に対して拙速で無計画な反応を行う特性”と定義されている (Moeller, Barratt, Dougherty, Schmitz, & Swann, 2001)。すなわち衝動性は、ネガティブなものとして捉えられ、これまでの衝動性研究の多くは、衝動性とそれがもたらす問題行動に焦点をあててきた。

しかし、Dickman & Meyer (1988) は、衝動性によってもたらされる行動が必ずしもネガティブなものではないことを実験的に示した。実験参加者に認知機能課題である同画探索検査をさせたときに、実験的課題が非常に簡単でかつ問題解決に要する時間が非常に短い場合には、衝動性の高い人は衝動性の低い人よりも、問題解決におけるエラーが少ないことを明らかにした。すなわち、素早い衝動的反応が認知機能課題の解決において、最適な結果をもたらすことを示したのである。つまり衝動性の高低が課題解決能力の優劣につながるのではなく、衝動的行動スタイルが適切に機能するかどうかは、課題の性質に依存することを示したのである。

このような実験結果をふまえ Dickman (1990) は、行動する前に熟慮しない衝動性の結果がいつもネガティブなもの

* 1 立正大学大学院心理学研究科心理学専攻博士後期課程

* 2 立正大学心理学部教授

ではない、すなわち衝動的行動には適応的側面があるとした。そこで衝動性には、機能的側面と非機能的側面があると考え、それぞれを機能衝動性 (Functional Impulsivity)・非機能衝動性 (Dysfunctional Impulsivity) と名付けた。そして、機能衝動性を“衝動的行動スタイルが最適となるときに先見なく行動する傾向”であるとし、非機能衝動性を“ゆっくり几帳面に行動することができず、先見なく行動し、結果的に行為者を不利な状況に導く行動をとる傾向”とした。さらに、機能衝動性による行動傾向は人にポジティブな結果をもたらし、その人の自尊心の源泉となるとし、一方、非機能衝動性による行動傾向はネガティブな結果をもたらし、その人にトラブルをもたらすとしている。

Dickman (1990) は、これら機能衝動性と非機能衝動性の測定のために、機能衝動性が11項目、非機能衝動性が12項目、フィラー項目が7項目からなる尺度 Dickman Impulsivity Inventory (以後、DII と表記) を開発した。DII では、機能衝動性と非機能衝動性との間の相関は低い ($r=.23, p<.05$)。また、機能衝動性・非機能衝動性と、Eysenck Personality Inventory (以後、EPI と表記; Eysenck & Eysenck, 1978) によって測定される衝動性との間の関係を検討したところ、機能衝動性・非機能衝動性ともに EPI 衝動性と正の相関がみられ、非機能衝動性の方が機能衝動性よりも EPI 衝動性と高い相関がみられた (機能衝動性 $r=.34$; 非機能衝動性 $r=.51$, ともに $p<.01$)。

この DII の日本語バージョンは作成されていない。日本における機能衝動性・非機能衝動性に関わる研究を調べてみると、加賀・若林 (2010) が機能性・非機能性からみた衝動性の特性を明らかにしている。彼らは、この研究において DII を日本語に翻訳している。この研究は学会発表であり、また尺度作成研究ではないために、DII 日本語訳は掲載がされていない。そこで、筆者らは、加賀・若林に私信にて問い合わせをし、DII の日本語訳の入手を依頼し、またその使用許可を得た。小橋・井田 (2013a) は、この DII 日本語訳をもとに質問紙を作成し、日本語版 DII の作成を試みた。この研究では、まず確認的因子分析を行い、因子的妥当性を検討するとともに、内的一貫性を検討してみた。その結果、日本語版 DII において、機能衝動性と非機能衝動性の2因子が検証され、2因子それぞれにおける内的整合性は確認された (機能衝動性 $\alpha=.70$; 非機能衝動性 $\alpha=.78$)。しかしながら、適合度指標に十分な値が得られず、2因子モデルとデータの当てはまり具合が良いとはいえなかった。この研究は、既存の DII 日本語訳にもとづくパイロット的な研究であり、日本語訳のバックトランスレーションをするというような手続きはふんでいない。また、心理尺度作成のオーソドックスな一連の手順——項目分析・探索的因子分析・確認的因子分析・内的整合性の検討・再検査信頼性の検討・妥当性の検討——をふまえてはいない。

そこで、本研究では、これら一連の手順をふまえた日本語版 DII を作成することを目的とする。まず、DII 日本語訳のバックトランスレーションを実施し、その意味内容が原版と変わらないかどうかを確認する。Dickman (1990) の原版質問項目をみると、特に機能衝動性に関わる質問項目では、状況設定をした質問文が作成されている。例えば、“such as ~”, “where ~”, “when ~”, “because” といった接続詞・関係副詞などが頻繁に用いられている。このようなことから、英語原版と日本語訳文の意味内容の一致・不一致を検討することは必要であろう。次に、バックトランスレーションにもとづく DII の日本語訳質問紙を作成し、これを用いて調査を行う。ついで、探索的因子分析によりその因子構造を明らかにし、その後、確認的因子分析を実施して因子モデルの適合性を検証する。さらに内的整合性および再検査信頼性を確認し、次のような DII 関連尺度を用いて妥当性を検討する。本研究では、日本語版 DII の構成概念妥当性を検討するために、改訂日本語版 Barratt Impulsiveness Scale-11 (以後、BIS-11 と表記; 小橋・井田, 2013b)、BIS/BAS 尺度日本語版 (高橋・山形・木島・繁樹・大野・安藤, 2007)、認知的熟慮性-衝動性尺度 (滝間・坂元, 1991) を用いる。

改訂日本語版 BIS-11 は、Patton, Stanford, & Barratt (1995) の作成した BIS-11 をもとに作成した尺度であり、運動的衝動傾向 (考えることなく衝動的に行動し自己制御が困難)、非計画的衝動傾向 (計画を立てることやじっくり考えることが困難) の2因子構造の尺度である。この尺度は心理学的に従来考えられてきた不適応な衝動性を測定するものとして、信頼性と妥当性が確認されている。Dickman (1990) によると、機能衝動性・非機能衝動性は Barratt Impulsivity Scale Version 5 (以後、BIS-5 と表記; Barratt, 1965) による衝動性と関連があることを示しているが (機能衝動性-BIS-5 間: $r=.30$; 非機能衝動性-BIS-5 間: $r=.26$)、その値は低く2つの衝動性の相違を反映していない。しかし、上述したように機能衝動性・非機能衝動性と EPI 衝動性との間に正の相関がみられ、その値は非機能衝動性の方が高い。このようなことから、機能衝動性および非機能衝動性ともに、改訂日本語版 BIS-11 の2因子と正の相関を示すがその値は非機能衝動性の方が高いと予想される。

BIS/BAS 尺度日本語版は、Carver & White (1994) による BIS/BAS 尺度の日本語バージョンであり、その信頼性と妥当性が確認されている。本尺度は、Gray (1981, 1990) の理論にもとづき作成されたものであり、行動抑制系 (Behavioral Inhibition System; 以下、BIS と表記) と行動賦活系 (Behavioral Activation System; 以下、BAS と表記) の感受性を測定できる。またこの尺度は BIS が 1 因子、BAS が 3 因子の 4 因子構造となっている。BIS 因子は「罰への回避傾向」であり、BAS の 3 因子は、「駆動 (望まれる目標への持続的な追求)」、「報酬反応性 (報酬の存在や予期に対するポジティブな反応)」、「刺激探求 (新奇な刺激や報酬刺激に対して思い付きで接近しやすい傾向)」である。この BIS/BAS と機能衝動性・非機能衝動性との間に関連のあることが明らかになっている。Smile & Jackson (2006) は、BAS 3 因子総得点と機能衝動性との間に正の相関があることを示している (機能衝動性 $r = .33$, $p < .01$; 非機能衝動性 $r = -.04$, $n.s.$)。このような結果から、機能衝動性を、ポジティブな刺激によって動機づけられ報酬 (または罰の軽減) をもたらす状況への接近である BAS と類似の概念であるとしている。また、Miller, Joseph, & Tudway (2004) も機能・非機能衝動性と BAS との関係性を報告している。Miller 等によると機能・非機能衝動性と BAS の「駆動」とは正の相関を示し、またその関係は機能衝動性の方が高い (機能衝動性 $r = .42$; 非機能衝動性 $r = .28$)。また機能・非機能衝動性と「刺激探求」とはいずれも比較的高い正の相関 (機能衝動性 $r = .43$; 非機能衝動性 $r = .48$) があることを示している。すなわち、機能・非機能衝動性ともに新奇刺激に対して思い付きで接近しやすいものの、機能衝動性は目標の達成に向けての接近行動をも伴うことが示唆される。したがって、本研究では、機能衝動性・非機能衝動性と BAS の「駆動」因子との間には正の相関があるが、機能衝動性の方が高く、機能衝動性・非機能衝動性と「刺激探求」因子との間にはいずれも高い正の相関があると予測する。

認知的熟慮性-衝動性尺度は、人が判断をするときに、じっくり考えて慎重に結論を下すかどうかという認知的熟慮性を測る尺度である。Dickman (1990) によると、機能衝動性と非機能衝動性は、ともに熟慮せずに行動する傾向と定義されている。このことから、機能衝動性および非機能衝動性は認知的熟慮性とは逆の特性として捉えられる。したがって、機能衝動性と非機能衝動性はともに認知的熟慮性とは負の相関を示すであろう。

方 法

質問紙の構成

1. 日本語版 DII 質問紙の作成

加賀・若林 (2010) の日本語訳 DII について、筆者らおよび心理学研究専門家で、Dickman (1990) の英語原文質問項目を参照しながら、原文の意味内容との一致・不一致について意見交換をしながら、検討をおこなった。この検討結果をふまえて日本語版 DII の原案を作成した。次にこの原案について、英語圏の大学・大学院で心理学教育を受けたバイリンガルにバックトランスレーションを依頼した。つぎに、英語圏で大学教育を受け就労している日本人にオリジナルの英文とバックトランスレーションの英文との比較検討を依頼した。これらの結果をもとに著者らおよび心理学専門家が協議の結果、原版と同様の機能衝動性の 11 項目・非機能衝動性の 12 項目からなる日本語版 DII を完成させた。回答は、“1. 全くあてはまらない” から “6. まさにあてはまる” までの 6 件法とした。

2. 改訂日本語版 BIS-11

改訂日本語版 BIS-11 は、運動的衝動傾向 (14 項目)、非計画的衝動傾向 (8 項目) からなる 2 因子構造の尺度 (合計 22 項目) である。“1. 全くあてはまらない” から “6. まさにあてはまる” までの 6 件法で回答を求めた。

3. BIS/BAS 尺度日本語版

BIS/BAS 尺度は、BIS の 1 因子 (7 項目)、BAS の 3 因子 (駆動 4 項目・報酬反応性 5 項目・刺激探求 4 項目) で構成されている。本研究では BAS の 3 因子のうち駆動 4 項目と刺激探求 4 項目、合計 8 項目を使用した。“1. あてはまらない” から “4. あてはまる” までの 4 件法で回答を求めた。

4. 認知的熟慮性-衝動性尺度

認知的熟慮性-衝動性尺度は、1 因子構造 (10 項目) で構成された尺度である。“1. あてはまらない” から “4. あてはまる” までの 4 件法で回答を求めた。

調査対象者

本研究の全対象者は、都内私立大学に通う546名（男性205名・女性341名，平均年齢=19.6歳， $SD=1.8$ ）であった。この全546名が日本語版 DII の因子分析対象者となった。このうち同意を得た65名（男性22名・女性43名，平均年齢=20.1歳， $SD=3.3$ ）が再検査信頼性の検討対象者であった。第1回目と第2回目の調査間隔は4週間であった。また上記全546名のうち339名（男性132名・女性207名，平均年齢=19.6歳， $SD=1.7$ ）が、上述した質問紙1.から4.をすべて回答し、構成概念妥当性の検討対象であった。

手続き

集団法による調査を実施した。報告バイアスを避けるため質問用紙は無記名自己記入式であり、大学の授業時間内に、協力を依頼した上で配布し、調査対象者の回答後ただちに回収した。なお、回答前に研究の趣旨を説明し、調査への参加は自由であること、個人のプライバシーは保護されることを口頭およびフェイスシートにて教示した。

再検査は、第1回目調査のあと4週間の期間において実施した。第1回目調査時に同意のあった対象者に再検査を実施した。再検査の対象者については、匿名性を遵守しつつ同一対象者であることを確認する手続きをとった。

結果

1. 探索的因子分析

日本語版 DII の23項目について、項目分析を実施した。全ての項目に床効果および天井効果はみられなかった。そこで、統計パッケージ SPSS (ver.18) を用いて、この全23項目について、項目の因子構造を確認するために、探索的因子分析（最尤法・promax 回転）を実施した。初期解第5因子までは固有値1以上であった。また項目番号2・12・22の共通性が.200以下だった。これら共通性の低い項目を分析から削除し、第3因子以下の固有値の変化を勘案し、さらには Dickman (1990) にもとづいて上位2因子を抽出することにした。最尤法・promax 回転による因子分析を再度実施し、いずれの因子に対しても負荷量が.35未満であった項目、また共通性が低い項目を削除しつつ、因子分析をくり返しおこなった。その結果、最終的には Table 1 に示した項目を削除し、理論的な整合性と今後の尺度使用の利便性を考慮した上で項目選定を実施した。その結果、解釈可能な2因子、各因子8項目計16項目が採用された。この因子分析結果を Table 2 に示す。この表に示されているように結果は尺度作成意図に合致するものであり、因子を構成する項目内容から第1因子を“非機能衝動性”、第2因子を“機能衝動性”と命名できる。また、因子の Cronbach の α 係数は、非機能衝動性=.820、機能衝動性=.750といずれも.75以上であり、高い内的整合性が得られた。

Table 1 削除項目の項目内容

項目番号	項目内容
2	何を着るかや夕食を何にするかのような簡単なことでさえ、すぐに決めることは好きではない。*
12	それほど難しくないことをするときでも、物事を急いで行うのは好きではない。*
22	最初にじっくり考えずに行動しなければならないようなことは、避けるようにしている。*
3	ゆっくり慎重に問題に取り組むことは楽しい。*
17	起こりそうな問題を事前によく考えることをせずに計画に参加することはほとんどない。*
19	重要な決定を下す前には、慎重にメリットとデメリットの両方を理解しようとする。*
21	綿密な推論や推理をすることが得意である。*

*は、逆転項目

Table 2 日本語版 DII の探索的因子分析結果（最尤法・Promax 回転） $n=546$

項目		因子 I	因子 II
I 非機能衝動性 ($\alpha = .820$)			
23	しばしば、結果についてよく考えずに、何かを言ったりしたりしてしまう。	.744	.061
13	しばしば、行動する前に考えないために、トラブルを起こす。	.697	-.077
1	しばしば、初めに考えることをせずに、頭に浮かんだことを何でも口に出してしまう。	.679	.052
9	しばしば、さまざまな角度から状況を考えるための時間をかけずに、判断を下してしまう。	.626	.015
11	しばしば、私は行動する前に状況を考えるということに、十分な時間をかけない。	.599	.146
15	前もって慎重に十分検討しないので、多くの場合、私が立てた計画はうまくいかない。	.553	-.202
5	よく、守れるかどうかを考えずに約束をしてしまう。	.507	.002
7	よく、本当に金銭的に余裕があるかどうかを考えずにものを買ってしまう。	.454	.042
II 機能衝動性 ($\alpha = .750$)			
20	すばやく物事を考えることができるので、人によく褒められる。	-.109	.696
14	一瞬の判断をたくさん求められるような仕事は楽しいと思う。	.064	.643
4	すぐに何かをしなければ失ってしまうような突然のチャンスをつかむことが得意である。	.035	.605
18	すばやく判断を下すことができないため、しばしばチャンスを逃してきた。*	-.214	.563
6	たいていは、自分が思っていることをすぐに言葉にすることができる。	.278	.514
8	すぐに判断を下さなければならないような状況に置かれると、落ち着かない。*	-.294	.449
10	話す前にほとんど考える時間がないような、とてもペースの速い会話に加わるのが好きである。	.230	.430
16	次の動きをすぐに決めなければならないようなスポーツやゲームなどが好きである。	.089	.368
	因子間相関	I	1.000
		II	.058
			1.000

*は、逆転項目

2. 確認的因子分析

次に、日本語版 DII の因子構造に関するモデル（機能衝動性・非機能衝動性の2因子）を確認するために、統計パッケージソフト SPSS/Amos18を用い、構造方程式モデルによる確認的因子分析を行った（最小二乗法）。その結果を Figure 1 に示した。各適合度指標は、RMSEA=.076 (90% CI=.068-.083) ; GFI=.902 ; AGFI=.871であった。AGFI は必ずしも高い値とは言えないが、RMSEA とともに許容の範囲内にあり、本尺度が機能衝動性・非機能衝動性の2因子からなるというモデルは支持され、したがって、日本語版 DII の妥当性が確認された。

3. 得点化および基本統計量

上記分析から日本語 DII の2因子構造が確認された。そこで、各因子を構成する8項目の合計得点（逆転項目の処理後）を算出し、項目数8で除したものをそれぞれの下位尺度得点とした。本研究での全対象者564名について各下位尺度得点の基本統計量を Table 3 に示した。なお、機能衝動性得点と非機能衝動性得点の相関係数は、 $r=.077$ ($n.s.$) であり両得点間に相関は見られなかった。

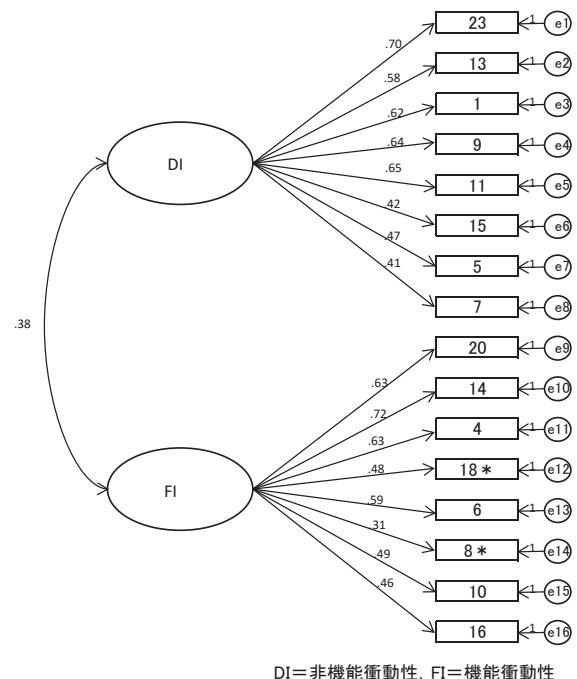


Figure 1 日本語版 DII の確認的因子分析パス図

Table 3 日本語版 DII の基本統計量 $n=546$

	平均値	SD	中央値	最小値	最大値	歪度	尖度
機能衝動性	2.967	.755	3.000	1.000	6.000	.154	.105
非機能衝動性	3.164	.857	3.125	1.000	5.750	.151	-.118

4. 再検査信頼性

再検査信頼性を検討するために、日本語版 DII 下位尺度得点ごとに、第1回調査-第2回調査間のピアソンの相関係数を算出した。それを再検査信頼性係数とした。その結果、非機能衝動性は $r=.784$ 、機能衝動性は $r=.819$ (ともに $p<.01$, $n=65$) であり、高い再検査信頼性係数が得られ、尺度の安定性が満たされた。

以上の1~4の結果から、本研究で作成された日本語版 DII の因子的妥当性ならびに信頼性は高いと判断し、本尺度項目を日本語版 DII の最終項目に決定する。

5. 構成概念妥当性

改訂日本語版 BIS-11の2因子、BASの2因子、認知的熟慮性尺度について、それぞれの尺度構成に従い下位尺度得点を算出し、それらの得点と日本語版 DII 各下位尺度得点との相関係数を算出した。その結果を Table 4 に示した。

日本語版 DII と改訂日本語版 BIS-11との関連では、機能衝動性においては運動的衝動傾向との間に低い正の相関が ($r=.175$, $p<.01$)、非計画的衝動傾向との間では低い負の相関が見られた ($r=-.300$, $p<.01$)。非機能衝動性においては運動的衝動傾向との間には高い正の相関が ($r=.731$, $p<.01$)、非計画的衝動傾向との間には比較的高い正の相関がみいだされた ($r=.491$, $p<.01$)。

また、BAS 2 因子との関連では、機能衝動性においては駆動および刺激探求との間には低い正の相関がみとめられた (駆動 $r=.335$, 刺激探求 $r=.232$, ともに $p<.01$)。非機能衝動性においては駆動との間には相関がなく ($r=-.032$, $n.s.$)、刺激探求との間に比較的高い正の相関がみられた ($r=.396$, $p<.01$)。

さらに機能衝動性・非機能衝動性とも認知的熟慮性とは負の相関がみられ、機能衝動性ではその係数の値は低く ($r=-.183$, $p<.01$)、非機能衝動性では比較的高い値が示された ($r=-.491$, $p<.01$)。

Table 4 各尺度間の相関係数 $n=339$

	改訂日本語版 BIS-11		BIS/BAS 尺度日本語版		認知的熟慮性- 衝動性尺度
	運動的衝動傾向	非計画的衝動傾向	駆動	刺激探求	認知的熟慮性
機能衝動性	.175 **	-.300 **	.335 **	.232 **	-.183 **
非機能衝動性	.731 **	.491 **	-.032	.396 **	-.491 **

** $p<.01$

考 察

本研究の目的は日本語版 DII を作成し、その信頼性と妥当性を検討することであった。そこで日本語版 DII (加賀・若林, 2010) の23項目についてバックトランスレーションを行い訳文の精査後、この23項目を用いて探索的因子分析を実施し、機能衝動性8項目・非機能衝動性8項目の2因子構造を得た。この2因子構造モデルは確認的因子分析により、各適合度指標が許容範囲内であり妥当性が確認され、また高い内的整合性および再テスト信頼性が得られた。上記の結果を踏まえ、本研究において機能衝動性・非機能衝動性各8項目をもって日本語版 DII とした。

この日本語版 DII の構成概念妥当性の検討において、不適応な衝動性を測定する改訂日本語版 BIS-11との関連を見たところ、非機能衝動性では改訂日本語版 BIS-11の2因子と比較的高い相関があった。一方、機能衝動性では運動衝動傾向とは低い正の相関であったが、非計画的衝動傾向とは負の相関であった。これらのことより、非機能衝動性は、従来

の心理学で捉えていたネガティブな衝動性と類似のものであることが推測された。機能衝動性に関しては運動衝動傾向があるものの計画性は持ち合わせるといったように、これまでの衝動性とは異なるものであることが推測された。先に述べたように、Dickman が用いた衝動性尺度である BIS-5 では 2 つの衝動性の相違は反映されていなかったが、本研究で用いた改訂日本語版 BIS-11 ではその相違を明らかにできたといえよう。Dickman によると機能衝動性と非機能衝動性間の相関は低く、本研究においても両衝動性間の相関は低かった。このことから改訂日本語版 BIS-11 において、機能衝動性・非機能衝動性を衝動性の異なる側面として捉えることができたことは有意義であろう。

また、BAS の 2 因子と機能衝動性との関連では、駆動および刺激探求との間でやや低いものの正の相関があったことから、機能衝動性が目標の達成に向けての接近行動や新奇刺激への接近と関連することが示された。このことから先行研究と同様に機能衝動性は、BAS と類似の概念であることが示唆された。一方、非機能衝動性との関連では、駆動との間に相関はなく、刺激探求との間のみが正の相関となり、その値は機能衝動性との相関よりも高かった。このことから、非機能衝動性の接近行動は、新奇刺激に対する思いつきによる接近行動とより関連することが示された。

さらに認知的熟慮性との関連では、機能衝動性では低い負の相関が、非機能衝動性では高い負の相関がみられた。このことから、機能衝動性・非機能衝動性ともに、認知的熟慮性とは逆の特性であることが示された。したがって、日本語版 DII の妥当性が確認された。

Dickman (1990) による機能衝動性の定義は“衝動的行動スタイルが最適となるときに先見なく行動する傾向”であり、非機能衝動性の定義は“ゆっくり几帳面に行動することができず、先見なく行動し、結果的に行為者を不利な状況に導く行動をとる傾向”である。本研究の妥当性の検討により、機能・非機能衝動性はともに先見なく行動する傾向であるものの、機能衝動性はポジティブな刺激により動機づけられたものであり、非機能衝動性は従来の心理学で捉えていたネガティブな衝動性であることが示された。

以上のことから、本研究で得られた日本語版 DII は、衝動的行動スタイルがポジティブな行動戦略となる機能衝動性とネガティブな衝動性としての非機能衝動性という衝動性の 2 側面を測る尺度として信頼性と妥当性が確認されたといえよう。

人々にとって、これまで衝動性はネガティブなものであった。したがって、人々は衝動的に行動することよりもよく考えてから自制的な行動をとることが良いと思ってきたと考えられる。しかし、衝動的な行動のすべてがネガティブなだけでなく、状況によっては最適な場合もあるという Dickman の提示は、人々にとってその行動に自由をもたらすものとなるのかもしれない。

引用文献

- Barratt, E. S. (1965). Factor analysis of some psychometric measures of impulsiveness and anxiety. *Psychological Reports*, *16*, 547-554.
- Carver, C. S. & White, T. L. (1994). Behavioral Inhibition, Behavioral Activation, and Affective Responses to Impending Reward and Punishment: The BIS/BAS Scales. *Journal of Personality and Social Psychology*, *67*, 319-333.
- Chambers, R. A., & Potenza, M. N. (2003). Neurodevelopment, impulsivity, and adolescent gambling. *Journal of Gambling Studies*, *19*, 53-84.
- de Wit, H. (2009). Impulsivity as a determinant and consequence of drug use: A review of underlying processes. *Addiction Biology*, *14*, 22-31.
- Dickman, S. J. (1990). Functional and dysfunctional impulsivity: Personality and cognitive correlates. *Journal of Personality and Social Psychology*, *58*, 95-102.
- Dickman, S. J. & Meyer, D. E. (1988). Impulsivity and speed-accuracy tradeoffs in information processing. *Journal of Personality and Social Psychology*, *54*, 274-290.
- Eysenck, S. B. J. & Eysenck, H. J. (1978). Impulsiveness and venturesomeness: Their position in a dimensional system of personality description. *Psychological Reports*, *43*, 1247-1255.
- Gray, J. A. (1981). A critique of Eysenck's theory of personality. In H. J. Eysenck (Ed.), *A model for personality* (pp. 246-276). Springer Berlin Heidelberg.

- Gray, J. A. (1990). Brain systems that mediate both emotion and cognition. *Cognition & Emotion*, *4*, 269-288.
- Hoyle, R. H., Fejfar, M. C., & Miller, J. D. (2000). Personality and sexual risk taking: A quantitative review. *Journal of Personality*, *68*, 1203-1231.
- Jonah, B. A. (1997). Sensation seeking and risky driving: A review and synthesis of the literature. *Accident Analysis and Prevention*, *29*, 651-665.
- 加賀沙智美・若林明雄 (2010). 機能性・非機能性からみた衝動性とその特性 日本心理学会第74回大会発表論文集, 42.
- 小橋真理子・井田政則 (2013a). 日本語版 Dickman Impulsivity Inventory の信頼性と妥当性の検討 感情心理学研究, 21, 33.
- 小橋真理子・井田政則 (2013b). 改訂日本語版 BIS-11 の作成: 信頼性と妥当性の検討 立正大学研究心理学年報, 4, 53-61
- Miller, E., Joseph, S., & Tudway, J. (2004). Assessing the component structure of four self-report measures of impulsivity. *Personality and Individual Differences*, *37*, 349-358.
- Moeller, F. G., Barratt, E. S., Dougherty, D. M., Schmitz, J. M. & Swann, A. C. (2001). Psychiatric aspects of impulsivity. *American Journal of Psychiatry*, *158*, 1783-1789.
- Patton, J. H., Stanford, M. S., & Barratt, E. S. (1995). Factor structure of the Barratt impulsiveness scale. *Journal of Clinical Psychology*, *51*, 768-774.
- Smillie, L. D., & Jackson, C. J. (2006). Functional impulsivity and reinforcement sensitivity theory. *Journal of Personality*, *74*, 47-84.
- 高橋雄介・山形伸二・木島伸彦・繁榊算男・大野裕・安藤寿康 (2007). Gray の気質モデル—BIS/BAS 尺度日本語版の作成と双生児法による行動遺伝学的検討 パーソナリティ研究, 15, 276-289.
- 滝間一嘉・坂元章 (1991). 認知的熟慮性—衝動性尺度の作成—信頼性と妥当性の検討 日本グループダイナミクス学会第 39 回大会発表論文集, 39-40.